

## 石垣の穴の秘密 —— そっとのぞいてみよう ——

森本敏一

石垣の丸い穴…石垣裏の地下水や雨水などの水を抜くための穴…を覗いてみませんか。たいがいは何も入っていないかあったとしても缶コーヒーの空き缶ぐらい。でもたまに、生き物たちが暮らしていることに出合います。ここではドロバチの巣とヤモリの卵を紹介します。

### ◆ドロバチの巣



穴の入口から中を覗くと穴の天井に巣を作っています(写真左)。なかなか硬くてとれませんが、穴の中に落ちていたものを針金で引っ張り出しました(写真右)。最近は石垣の穴の中を観察することが多くなり、カタツムリ、陸生の巻貝などに出会います。

巣穴の中には昆虫の羽根のようなものがありましたが、何かわかりません。

### ◆ヤモリの卵



近くの穴の入口で日向ぼっこをしていたヤモリがいたので(写真左)、ヤモリの卵だと思うのです(写真中)。付近には数個の穴に卵が産みつけてありました(写真右)。ヤモリは天井にくっつけて産卵するのだと図鑑で知りました。

## 宝塚のトンボ 「ムカシヤンマ」と「ハッチョウトンボ」

森野光太郎



ムカシヤンマは6～8cm くらいの体長で、日本固有種の1属1種が分布しています。

このトンボはハッチョウトンボと同様、生息場所が減っている種で、分布はかなり局地的です。山地の斜面から水がしみ出していてコケの生える森林環境に生息しています。

大きくなった幼虫は、湿った土に穴を掘ってその中に住み、微小昆虫を捕食して生活しています。原始的なトンボの特徴をもち独特な止まり方や飛び方をするので、不均翅亜目の中では

大昔に種分化した種とされていましたが、近年の研究で見直されるかもしれません。

ハッチョウトンボは1円玉程度の日本で一番小さいトンボです。他のトンボと比べて小さすぎるので一見わかりませんが、目が慣れるとだんだん見えるようになっていきます。小さいながらもトンボらしい生態をしていて、微小昆虫を食ベナワバリ活動もしています。生息場所は水のしみだす湿地を好みますが、移動性はあまり高くないため、農薬や宅地造成の影響を受けて限られた場所にしかいません。

(※いずれも宝塚自然の家内にある松尾湿原で撮影)



## 武庫川だより 「カルガモ親子」

森田 至

カルガモ親子は、この時期に毎年見られます。今年の初見は5月14日で、8羽の子どもを確認しました。(昨年は10羽)



6月18日現在6羽に減っていますが、大人に近い顔になっています。カルガモの雛は生まれたときから、刷り込みという習性で、はじめに見た動くものを親と認識してついて行き、その行動を学習します。だから、餌もすぐに自分で採るようになります。

カルガモは留鳥で年中武庫川では見られますが、他のカモと違って、雌雄同色でヒトの眼では区別がほとんどつきません。

どうしてカルガモ同士は雌雄をみわけているのでしょうか。実は、鳥類は4色型色覚(ヒトは3色型)を持っていて、紫外線を感知することができます。我々には同じ色に見えても羽毛が紫外線を反射するか吸収するかで色が違って見えます。だからカルガモ自身は簡単に雌雄の区別がついているはずです。



母ガモのすごいのは擬傷行動をすることです。私の経験ですが、寄州の草むらで動くものがあつたので近づくと、突然バサッと音がして、子どもたちは川の流れの方向に逃げ、親は私の方に近づいてきて羽をばたつかせながらもがき、飛べないふりをして気を引いていました。その後、子どもの無事を確認してから、何事もなかったように子どもたちの方に飛んでいきました。本能的なものとはいえ、親が子どもを守る知恵に感心させられました。

因みに悪知恵の話です。皆さんは「カルガモ走行」をご存じですか。私は最近のTVニュースで初めて知りました。高速道路の料金所で大きな車の後ろにぴったり付き、不正に通過する方法で料金をごまかした話です。阪神高速が「軽く鴨られた」と言う悪い冗談が思いつきました？

## ギフチョウ保全活動から

## ギフチョウ保全の会



今年も4月に成虫が産んだ卵をサナギになるまで飼育してきました。ギフチョウの飼育は自然の家ができたころから始まっていますので、あしかけ40年以上。卵を保全のメンバーが持ち帰り、約4~50日間サナギになるまで育て、先日持ち寄りました。今年はサナギの数が100匹強。羽化する来年3月下旬までの長いサナギの期間です。